

生研10年のあゆみと今後の発展をめざして

16代所長 岡 田 恒 男



創立40周年という記念すべき年に、はからずも所長職という重責をおおせつかることとなり、若干のとまどいと緊張感をもって本稿を草している。このたび、30周年誌に続き、40周年誌を編纂するに当たり、この10年を振り返り明日への糧としたい。

本所の沿革、概要および毎年の活動状況などはB5版約400ページに編集されてきた年刊の年次要覧に詳しいが、その沿革を要約すれば、昭和24年5月31日に生産に関する技術的諸問題の科学的総合研究に重点を置くことを目的とした附置研究所として東京大学に設置され、爾来、工学と工業の融合を目指した基礎ならびに応用研究と、大学院レベルの教育に携わり、40年の歴史を積み重ねてきた。

本所の研究・教育の基本単位は研究室である。100名近い教授・助教授が個々の研究室を主宰し、最新の研究分野にふさわしい専門分野名を設定し、時代の進歩に対応した各個研究を行っている。これらの各個研究は、工学のほとんどすべての分野をカバーする幅広いスペクトルを有している点が特徴である。詳細は年次要覧にゆずることとするが、本所の今一つの大きな特徴は、これらの各個研究を基礎とした共同研究あるいはプロジェクト研究のグループが、所内の研究室あるいは所外の研究者をも含めて構成され常に活動している点にある。個々の研究室で芽生えた創造的な基礎研究が広く社会へ巣立つ道を拓くためには、このようなグループ化もまた必須である。更に付加するなら、本所においてはこのようなグループが固定化されることなく、極めて機動力に富む形態で運用されていることである。

21世紀の社会を予測するキーワードとして、国際化・情報化・多様化・高齢化等があげられて久しい。未来を創造することを目的とする本所としても無縁ではあり得えない。昭和59年より開始された生研国際シンポジウムは「画像処理とその応用」に始まり、昭和63年度の「マシン・インテリジェンスとビジョンの産業応用に関する国際ワークショップ」に至るまで、6件を数える。また、外国人留学生の受け入れを活発に行っていることは言うまでもないが、昭和60年より外国人研究者招聘制度を新設し、すでに20名の研究者を招聘してきた。情報化社会への基礎となる研究は本所で最も重点を置いている研究分野の一つである。各個研究の推進はもとより、「多次元画像情報処理センター」の時限到来に伴う「機能エレクトロニクス研究センター」の新設、客員部門「多次元数値情報処理工学」の新設、「人工衛星による広域多重情報収集解析」、ならびに「ヘテロ電子材料とその機能デバイスの応用」等のプロジェクト研究の推進等が挙げられよう。多様化・高齢化社会へ対応しうる研究へ本所の各個研究がどのように総合できるかは今後の課題であろうが、各個研究を特に後者について見渡せば、例えば、環境、防災、空間、都市、ロボット、先端素材等関連する多くのキーワードが見い出せる。

創立40周年に当たり、所の最近の活動を要約してみた。人生でいえば不惑である。しかし、科学には進歩はあっても老いはない。次の10年も基本的には従来の路線を歩みつつ、新たな展開をはかる段階にある。先に述べたように、本所の発展の基礎体力となっているのは何といても各研究室における自由な発想に基づく創造的研究である。これらの体力をより増進させるための研究・教育に関する施設・設備の基幹整備もまたこれからの課題である。